



静嘉堂文庫本 『源氏露』 小考（二） 唐の舞

著者	中葉 芳子
雑誌名	國文學
巻	83-84
ページ	194-203
発行年	2002-01-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/2501

静嘉堂文庫本『源氏露』小考(二)

唐の舞

中葉芳子

はじめに

静嘉堂文庫所蔵『源氏露』(外題「源氏物語歌註」)は、伝藤原定家作「光源氏巻名歌」に解説を加えたものである。この解説の中には、秘伝めかした講釈とでも言うべき叙述が含まれており、「光源氏巻名歌」の注釈書とも『源氏物語』の梗概書とも言い切れない面を持っていることは、すでに述べている。そして、その叙述は、中世の連歌師たちによって『源氏物語』の別伝の世界として語り継がれてきたものであり、秘説・秘伝とも深い関わりを持っていると考えられる。

この『源氏露』の叙述の中でも、光源氏と「唐人」とが関わる叙述から垣間見える「中世源氏物語の世界」に、興味深いものが多い。

既に、皮衣・蕉物・扇・鏡を「唐人の贈り物」とし、これらに関連する秘説・秘伝を集め、読み解いていく中で、背景にある「中世源氏物語の世界」を明らかにした。^注

本稿では、光源氏と「唐人」との関わりの一つである、「唐の舞」について考えていくことにする。

一 唐の舞とは

『源氏露』^注紅葉賀巻には、次のような叙述がある。

朱雀院より源氏をせめたまひて、からの舞をまひ給へとそおほせられける。此心は、昔源氏、かうろくはんにてからの人舞をおしへ奉る時、大國の舞をおしへ奉る。源氏やかてうけとり給ひてなひく／＼に御けいこあり。此舞はたくなきひきよくなり。

いまた御門の御前にてはまひたまはさりければ、彼もみちの賀をおもひたちたまひて、源氏の舞を見んとそもよはされける。

御門のせんしそむきかたきによりて、けんしもまはんとの御心あり。さてたがひの人は源氏のこせうと、頭中将と申て、是もかたちたくひなき人にておはしますなり。彼人は柳花園をそ舞給ふ。源氏は青海波を舞給ふ也。かさしにはもみちをささせ給ふ。夕はへにてりわたり、かほの匂ひそこびをます。天人の舞もかくあるらん、と御門をはしめ奉り、くきやうたちにいるるまで、かんにめひしほめ給ふ。折ふし夕風吹てかさしの柗ちりたりければ、左大臣殿、御前の菊をおりてかさしにさしそへ給ふ。源氏の舞はからの舞と申。頭中将の舞はくさいこくのまひなり。いづれもく面白かりけり。

光源氏が鴻臚館で唐人から大國の舞を教わり、稽古をしていた。その舞は、秘曲であった。そのため、帝の前でもまだ舞ったことがなかった。それで、この舞を見なくなった帝が、紅葉賀を思い立った。そこで、光源氏は青海波を、相手の頭中将は柳花苑を舞った。光源氏の舞を見た人は、「天人の舞もこのようなものだろう」と感激した。この時、光源氏の舞った舞が、「唐の舞」というのである。同様の記述は、花散里巻にも見られる。

(前略) 桐つのはの御門の御時、唐人来りて大國の舞のきよくを

まふ也。かうろくはんにおゐて、彼舞を唐人にまはせて御門御らんとてゑひらんありて、其後源氏に彼舞を唐人おしへ奉る也。

此舞を相伝し給ひて、紅葉の賀の巻に頭中将と左右をあらそひて青海波を舞給ふ。中将は柳花多んをまひ給ふなり。(後略)

桐壺帝の御代、唐人が来て、鴻臚館で大國の舞の曲を舞って帝に見せた。その後、唐人は光源氏にこの舞を教え、光源氏が相伝した。それを、紅葉賀巻に頭中将を相手にして舞った。その舞が青海波で、この時、頭中将は柳花苑を舞った、というのである。帝は、唐人の舞った舞を見ていたことがわかる。

このように、『源氏露』では、「唐の舞」に関する叙述が見られる。しかし、『源氏物語』本文には、このようなことは書かれていない。物語本文で、光源氏が舞を舞うのは、二度、紅葉賀巻と花宴巻である。紅葉賀巻では、

朱雀院の行幸は神無月の十日あまりなり。世の常ならず、おもしろかるべきたびのことなりければ、御方々、物見たまはぬことをくちをしがりたまふ。上も、藤壺の見たまはざらむを、飽かずおぼさるれば、試案を御前にてせさせたまふ。源氏の中將は、青海波をぞ舞ひたまひける。片手には大殿の頭の中將、容貌、用意、人にはことなるを、立ち並びては、なほ花のかたはらの深山木なり。入りかたの日かけ、さやかにさしたるに、

楽の声まさり、もののおもしろきほどに、同じ舞の足踏み、おももち、世に見えぬさまなり。詠などしたまへるは、これや、仏の御迦陵頻伽の声ならむと聞こゆ。おもしろくあはれなるに、帝、涙をのこひたまひ、上達部、親王たちも、みな泣きたまひぬ。詠果てて、袖をうちなほしたまへるに、待ちとりたる楽のにぎははしきに、顔の色あひまさりて、常よりも光ると見えたまふ。(中略)

行幸には、親王たちなど、世に残る人なくつかうまつりたまへり。春宮もおはします。例の、楽の船ども漕ぎめぐりて、唐土高麗と尽くしたる舞ども、種多かり。楽の声、鼓の音、世をひびかす。(中略)

木高き紅葉のかげに、四十人の垣代、言ひ知らず吹き立てたるものの音どもにあひたる松風、まことの深山おろしと聞こえて吹きまよひ、色々に散り交ふ木の葉のなかり、青海波のかやき出でたるさま、いと恐ろしきまで見ゆ。かざしの紅葉いたう散り過ぎて、顔のにはひにけおされたるこちすれば、御前なる菊を折りて、左大将さしかへたまふ。日暮れかかるほどに、けしきばかりうちしふれて、空のけしきさへ見知り顔なるに、さるいみじき姿に、菊の色々うつろひ、えならぬをかざして、今日はまたなき手を尽くしたる入綾のほど、そぞろ寒く、

この世のこととおおぼえず。もの見知るまじき下人などの、木のもと、岩がくれ、山の木の葉にうつもれたるさへ、すこしも
の心知るは涙おとしけり。
(一一頁〜一五頁)^{作四}

と巻の冒頭から、朱雀院の行幸の試楽と行幸当日のことが描かれる。この両日とも、光源氏は、頭中将とともに青海波を舞い、そのすばらしさが言葉を尽くしてほめたたえられている。ここで、『源氏露』の叙述を思い出してみよう。『源氏露』では、光源氏は青海波を、頭中将は柳花苑を舞った、と記されていた。しかし、物語本文では、頭中将は光源氏とともに青海波を舞っている。これは、花宴巻との混同だと思われる。花宴巻を見てみよう。

きさらぎの二十日あまり、南殿の桜の宴せさせたまふ。后、春宮の御局、左右にして、まうのぼりたまふ。弘徽殿の女御、中宮のかくておはするを、をりふしことにやすからずおぼせど、物見にはえ過ぐしたまはで参りたまふ。(中略)

楽どもなどは、さらにもいはずととのへさせたまへり。やうやう入り日になるほど、春のうぐひすさへづるといふ舞、いとおもしろく見ゆるに、源氏の御紅葉の賀のをり、おほしいでられて、春宮、かざしたまはせて、切に責めのためはするに、のがれがたくて、立ちて、のどかに、袖かへすところをひとをれ、けしきばかり舞ひたまへるに、似るべきものなく見ゆ。左の大

臣、うらめしさも忘れて、涙落したまふ。「頭の中將、いづら。遅し」とあれば、柳花苑といふ舞を、これは今すこし過ぐして、かかることもやと心づかひやしけむ、いとおもしろければ、御衣たまはりて、いとめづらしきことに人思へり。

(四九頁〜五一頁)

宮中の南殿の桜の宴の際、先の紅葉賀巻での光源氏の舞のすばらしさが忘れられなかつた東宮は、光源氏に舞を所望する。光源氏はそれに応じ、まね事のようにひとさし舞った。この時、頭中將も催促されて、柳花苑を舞っている。

このように、物語本文では、先に掲げた『源氏露』が述べるような、光源氏が舞を舞うに至った背景や舞の伝来については、何一つ記されていない。それに、「唐の舞」という語も出てこない。「唐の舞」とは、一体どのような背景を持った語なのだろうか。

二 秘説の背景

「唐の舞」を考えていくに際しては、「唐人」が詠み込まれている紅葉賀巻の物語本文、光源氏と藤壺の贈答歌が手かりになるであろう。

つとめて、中將の君、

いかに御覧じけむ。世に知らぬ乱りこちながらこそ。

もの思ふに立ち舞ふべくもあらぬ身の

袖うち振りし心知りきや

あなかしこ。

とある御返り、目もあやなりし御さま、容貌に、見たまひ忍はずやありけむ、

唐人の袖振ることは遠けれど

立居につけてあはれとは見き

おほかたには。

とあるを、限りなうめづらしう、かやうのかたさへたとだしからず、ひとのみかどまで思ほしやれる御后言葉の、かねても、と、ほほるまれて、持経のやうにひき広げて見るたまへり。

(一三頁)

試案の次の日、光源氏と藤壺が、昨日、光源氏が舞った青海波に関して贈答した場面である。ここで藤壺が、「唐人の袖振ること」と詠んでいるのは、青海波が、本来は唐土から伝わった唐の楽だということを示している。このことは、『花鳥余情』^{（註）}で、

から人の袖ふることはとをけれど立るにつけてあはれとはみき
青海波は盤渉調、唐楽也。から人の袖ふるとよみ給へるに、
相違なかるへし。

(紅葉賀巻 6)

と注釈するのを初めとし、以後の古注釈書でも同様に注釈され、現

代の注釈もこれを踏まえる。しかし、梗概書では、異なった解釈がなされている。

から人の袖ふることはとをけれど立居につけてあわれとは見き、とありしなり。から人の袖ふる事は、唐、楊貴妃、けいしやううみのまひをよそへけるとかや

〔異本源氏こかゞみ〕^法 紅葉賀巻)

から人の袖ふる事はとをけれど

立るにつけてあはれとはみき

此から人は、玄宗の、楊貴妃に舞をまはせて見給し事もいふ。

又、たうのかうそうといふ御門は、まゝ母後の御まへにて、青海

波を舞てみせ給し事あり、ともいふ。(後略)

〔源氏物語抜書抄〕^性 紅葉賀巻)

「唐人の袖振ること」には、玄宗皇帝・楊貴妃・霓裳羽衣の舞が関係する、としている。玄宗と楊貴妃との関係は、白楽天の「長恨歌」を通してよく知られている。また、霓裳羽衣の舞は、その「長恨歌」の中に出てくる。驪宮で、玄宗と楊貴妃とが宴を開いている場面に、

「驚かし破る霓裳羽衣の曲」という詩句があること、方士が仙山で見た楊貴妃の様子を、「風は仙袂を吹いて飄飄として挙がる／猶霓裳羽衣の舞に似たり」と形容していること、である。このように、

玄宗・楊貴妃・霓裳羽衣の舞は、「長恨歌」によって関係づけられ

る。それでは、この三者と「唐人の袖振ること」との関係が、もう少し詳しく記される『源氏物語提要』^性を見てみよう。

から人の袖ふることはとをけれど

たちゐにつけて哀とは見き

此業は唐の業也。唐ははるかなる事にてしりかたく、きのふ

源氏の舞給ひしは、限なくおもしろく、哀にわすれかたしと也。

されは唐の玄宗は、楊貴妃御てうあひならひなし。或時、方士

といふ者を召て、月の宮を見度よし仰ければ、見せ奉らむとて、

仙術をもつて月の宮へはしをかけ、帝、楊貴妃をいさなる奉り、

かなたこなたを見給ふに、えもいはすおもしろき業の音する所

有、比はむ月十六日の事也。是は何といふ業そとはせ給へは、

これこそ霓裳羽衣の曲と申。是を下界へうつし度よし仰ければ、

かしこまり、方士天人にこふて、下界へうつし、楊貴妃に授奉

る。笛をは玄宗習ひ給ふ。此事をおもひ出て、源氏の青海波の

舞の袖もかくやと覚し召と云事をよみ給へり。(後略)

(紅葉賀巻)

ある時、方士の仙術で月の宮へ行った玄宗と楊貴妃は、霓裳羽衣の曲という業の音を聴く。そのすばらしさに感動し、下界へ伝えたいと思った。そこで、天人の許可を得て、霓裳羽衣の曲を楊貴妃が教わった。玄宗は笛を習った。藤壺は、その事を思い出して「唐人の

袖振ること」と詠み、光源氏の青海波の舞をほめたたえた、というのである。

しかし、藤壺は、光源氏の青海波の舞で、なぜ霓裳羽衣の舞に關するこの故事を思い出したのであろうか。この疑問に答えるのが、先に引用した『源氏露』花散里巻の箇所のある叙述である。

取分花ちる里と申は、昔をのみおもひ給ひて、たち花をくちすさみ給ふ。たち花の香をなつかしきとおほせられしより、此君を花ちる里と申は、彼君の御かたちすくれ給ふとて、御門も御めをたて給ひし人そかし。内々母宮もきさきになし奉らん事を御心あて有し人也。かたちは花にたとへ奉るといへり。およはぬかた／＼も、聞およふまもゆかしくありかたく思ひ、此いはれにや、かんでいのみやこを思ひて詩を作り給ふ。春秋長して宮の鶯百囀り、とくちすさみ給ふ。此詩の心は、もろこしのけんそうくはうていは后を三千人もち給ふ。中にもすくれて、やうにとてうあひの後あり。又やうきひとてならひなき后参り給ふに御心をうつし給ひて、あさまつりことおも忘たまふ也。勝陽仁をもいつしか忘給ひて、春秋を送り給ふ。彼宮に鶯の啼けるを、白楽天聞給ひてくちすさみ給ふ詩の心なり。宮の鶯と申は、此時よりいひならはしたる也。定家の歌にも、此心を度々よまれし也。れいけいてんと申は、もろこしのしゆふやうを

うつせり。彼しゆふやうくうにて、やうきひ、天人の舞をまひ給ふ。是けいしやううゐのきよくと申也。御門、此舞を始は勝

陽仁にまはせて御らんしけるか、いまは彼陽貴妃舞給ふ。有時勝陽仁をめして、かの舞をまはせ給ふ。右をは勝陽仁、左をは

やうきひまひ給ふ。天人の姿なるへし。彼舞のとくに、しゆふやうちん、二度御門に見え給ふ也。さてかの舞を代々につたへ

て、桐つほの御門の御時、唐人来りて大国の舞のきよくをまふ也。かうろくはんにおゐて、彼舞を唐人にまはせて御門御らん

してゑひらんありて、其後源氏に彼舞を唐人おしへ奉る也。此舞を相伝し給ひて、紅葉の賀の巻に頭中将と左右をあらそひて

青海波を舞給ふ。中将は柳花ゑんをまひ給ふなり。(後略)

花散里は、容貌が美しく、帝も興味を持っていた。母親は、花散里を后にしうと思っていた。このことを漢詩で表わすと、「春秋長

して宮の鶯百囀り」になる。実はこの詩は、玄宗と上陽人と楊貴妃とのことを詠んだものだ、というのである。そして、この玄宗と上

陽人と楊貴妃とのことは、『異本源氏こかゞみ』『源氏物語拔書抄』『源氏物語提要』に見られた玄宗皇帝・楊貴妃・霓裳羽衣の舞が關

係する「唐人の袖振ること」の解釈と共通するところがある。

『源氏露』で引用された「春秋長して宮の鶯百囀り」は、白楽天の「上陽白髮人」にある詩句、「秋夜長し／＼(中略)／＼春日遅し／

(中略)／宮鶯百囀するも愁いては聞くを厭い」をまとめたような形である。また、「白髪上陽人」で、「上陽宮に住む人」の意で用いられている「上陽人」を、固有名詞として扱っている。そして、上陽人を、楊貴妃が入内する前に、玄宗が寵愛していた女性だとする。しかし、楊貴妃が入内したことによって、上陽人は玄宗に忘れられる。天人の舞である霓裳羽衣の曲も、始めは上陽人が舞っていたのであるが、楊貴妃入内後は、楊貴妃が舞うようになった。ある時、玄宗は、右に上陽人、左に楊貴妃で、この舞を舞させた。この舞の徳により、上陽人は、再び玄宗の寵愛を受けることができた。その後、この舞を代々伝えてきた唐人が、光源氏に鴻臚館で教えた、というのである。ここで、楊貴妃と上陽人との舞を「天人の舞」といったのは、先に掲げた『源氏物語提要』の中で、霓裳羽衣の曲は天人から教わったものだとしることに由来すると考えられる。また、『源氏露』紅葉賀巻で、光源氏の舞を見た人が、「天人の舞もかくあるらん」とほめたたえたのも、同様の理由であろう。

玄宗・上陽人・楊貴妃と霓裳羽衣の曲とのことは、『源氏露』と『異本源氏こかゞみ』『源氏物語抜書抄』『源氏物語提要』とでは、記されている内容に多少があり、一部異なっている。しかし、お互いに共通する解釈もあり、相補うことで一つの世界が見えてくる。これらが、同じ秘説を共有していることは確かであろう。

これらの事から考えると、「唐の舞」は、紅葉賀巻の藤壺の和歌に詠まれた「唐人の袖振ること」という表現の真意を探り、物語本文の表面には描かれていない背景を明らかにしようとした結果、作り出された秘説なのではないだろうか。

三 秘説の広がり

この「唐の舞」は、光源氏だけにとどまらず、女性たちにも広がりを見せる。先に掲げた『源氏露』花散里巻の引用箇所が続く叙述を見てみると、

(前略)さて女三の宮に女かくと云し事は、彼やうきひと勝陽仁との天人の舞をうつつして舞給ふきよくを女かくとはいへり。源氏、女三の宮におしへ給ひて、女三の宮と左右を舞給ふを、御門御らんして、世にありかたしとほめ給ふは此事也。花ちる里は、此舞を度々源氏にならひ奉らんとありけれども、つゝにおしたまはず、と家隆のせつにはちふせり。定家は、此きよくをならひて、御かとも后にも舞て見せ奉り給ふといへり。

楊貴妃と上陽人との天人の舞を写して舞う曲を、女楽という。光源氏が女三の宮に教えて、二人で帝の前で舞った。帝はそれを見て、「世にありがたし」とほめた。花散里は、この舞を教えてほしいと光源氏に頼んだが、光源氏は教えなかった、という説と、光源氏が

らこの曲を習った花散里は、帝と后の前で舞って見せた、という説がある、という。

ところで、この叙述だけでは、ここに出てくる女三の宮が、光源氏の姉妹である桐壺院の娘なのか、光源氏の妻になった朱雀院の娘なのか、はっきりしない。しかし、「女楽」と言うと、物語本文の若菜下巻の六条院でおこなわれた女楽が思い浮かび、女三の宮は、朱雀院の娘であるように感じられる。この思いは、『源氏露』若菜上巻にある、次のような叙述によって強められる。

若菜の上よりそひふしのさゝめことよむは、其頃の御門は正月初に御あそひ有。是は大内のしゝむ殿に御幸成ていせの御形をうつし奉り、内侍所もなんとしてあそひ給ふなり。其人のきよふによりて、きんせき・しちくととのへて管弦有。その中にも女三の宮と聞しは朱雀院の御娘也。彼御方を大内へよひ奉りて御あそひの人しゆになし給ふ。彼御あそひの舞のきよくを、源氏女三の宮におしへ奉り給ふ御心を、よりあひふしのさゝめことよむはよむ也。

光源氏が、朱雀院の娘の女三の宮に舞の曲を教えた、とある。この舞の曲が、花散里巻で出てきた「天人の舞」かどうかは明らかではない。けれども、「光源氏が女三の宮に舞の曲を教えた」という解釈が共通することから考えると、花散里巻の女三の宮も、朱雀院の

娘である可能性が高まったとはいえるだろう。

以上見てきたように、紅葉賀巻の光源氏の青海波の舞から始まった「唐の舞」が、物語本文では舞に無関係の花散里や女三の宮にまで広がっていた。さらに言えば、この「唐の舞」に関する秘説は、どうやら以前に明らかにした「唐人の贈り物」と深くつながっているようである。

一とせ後鳥羽の院の御時、俊成の卿へみかより、雲かくれの巻、其外源氏のゆらひをこまかにしるして奉るへきなりとせんしありしに、御返事には、定家の卿の方へ代々集の心もとなき所を書たる家の集物をわたしたるよし御返事申さる。さて俊成より定家の方へおほせられけるは、大内よりせんし有り。ぐらうは此物かたりをこまかに見事六十度におよへり。ふしんのみにてひか事をや書出すらんとあそはして、みかより御たつね有しかとも、いかゝあらんとおほせつるなげに書給ひたりと云。定家は八代集を見る事数箇度におよべり。さりながら、桐つほより夢のうき橋までこまかに御覧して、ふしんの所をあつめて家隆のかたへ尋給ふ。家隆はいち／＼にさたして、わたくしにもち給ふ。桐つほよりはしめてかゝれたり。第一に桐壺の巻に宮城野の歌のことは、命婦の鈴虫を歌に、はゝき木にそのはらやふせやとよむは、歌わかたのたよりと云事。さてまきのふしん、

いかなることをたいもくにて付たるそやと云事、兵部卿のこと、たいゑきのふようと云事、源氏のしやうを給りて加冠し給ふ事、から人源氏をやしなひ奉りけいのふをおしへ奉る事、第一にからのぶどう、第二にからゑかくすま、第三に「たき物合の事、第六に仏道修行の事、第七に人のふるまひ、第八に女をあはれむ事、第九に御門につかへ奉る事、第十に諸神のあはれみ給ふ、第十一にかほくなる事、第十二にたみをはこくむ事、第十三に国父になる事、もろくくの御子たち、この外春夏秋冬にことにつゐてみかとかへくわんのちやう立し事、上中五日御しやうしん有てまつりことし給ふ事、かやうにから人おし奉る。御門も君もよろこひ給ひて、国々より参る御たから物共から人に給り、唐人より源氏へまいらするもの、かゝみ・あふき・たき物・かは衣・弓、是ら末には代々のでうほうとなるとかや。

〔源氏露〕雲隠巻)

後鳥羽院から「雲かくれの巻、其外源氏のゆらひ」を書いて献上するよう、という仰せが俊成にあった。しかし、俊成は、定家に家に伝来する書を譲ったので、と断った。その後、俊成は定家に、こういう仰せがあった、と伝えた。それを聞いた定家は、不審箇所を書き集めて、家隆に尋ねた。家隆はそれに答え、自分でも所持した。その中に、「から人、源氏をやしなひ奉り、けいのふをおしへ奉る

事」があり、「第一にからのぶどう(引用者注 舞踏カ)」として、「唐の舞」のことが出てくる。その他にも様々なことを、唐人が光源氏に教えてくれたことに感謝し、帝や光源氏から「国々より参る御たから物共」を唐人に与えた。唐人からは、「代々のてうほうとなる」贈り物を光源氏に献上した、という。

この雲隠巻の叙述から、「中世源氏物語の世界」において、光源氏と唐人は、かなり深くつながっていることが知られる。唐人は来日した時、光源氏をかわいがり、「唐の舞」を始めとして、様々なことを教えた。その上、「唐人の贈り物」も与えた。このような解釈をしていた独自の物語世界が、中世では伝えられていたのである。要するに、光源氏と唐人とが関わる「中世源氏物語の世界」があつて、その一部が、「唐人の贈り物」や「唐の舞」という秘説として切り取られて断片的に伝わっている、と言えるのである。

最後に

以上見てきたように、「唐の舞」という秘説の源流は、紅葉賀巻における光源氏の青海波の舞であつた。しかし、その舞に関して、「唐人の袖振ることは遠けれど」と藤壺が詠んだことにより、「唐人」が関わる別伝の世界へとつながっていった。その「唐人」が関わる「中世源氏物語の世界」は、既に明らかにした「唐人の贈

り物」にもつながっていくものであることが確認できた。

光源氏と「唐人」に関して、『源氏露』で具体的に叙述されている秘説は、「唐人の贈り物」と「唐の舞」しかない。しかし、雲隠巻の叙述を見る限り、もっと多くの秘説・秘伝があったはずである。断片的に記されている秘説・秘伝の、関連を見極めて拾い集めていけば、それそれだけでは解釈できず、意味不明で荒唐無稽な説として顧みられなかった秘説・秘伝が、一つの世界を形成していることが知られるのではなからうか。そして、その世界が、中世において連歌師たちによって語り継がれ、一部の人々には、『源氏物語』の真実として享受されていたこともわかってくると思う。

注

- 一 拙稿「静嘉堂文庫本『源氏露』をめぐって」(『国文学』(関西大学) 第七十五号 平成九年三月)
- 二 拙稿「静嘉堂文庫本『源氏露』小考―唐人の贈り物―」(『国文学』(関西大学) 第八十一号 平成十二年十一月)
- 三 『源氏露』の引用は、『静嘉堂文庫所蔵『源氏露』(解題・翻刻)』(片桐洋一編『王朝文学の本質と変容 散文編』平成十三年 和泉書院)による。
- 四 『源氏物語』の引用は、新潮日本古典集成『源氏物語 二』

により、頁数を示した。

- 五 『花鳥余情』の引用は、『源氏物語古注集成』(桜楓社)による。番号は、項目番号を示す。
- 六 片桐洋一編『異本源氏こかゞみ』(昭和五十三年 和泉書院)により、私に句読点を付した。
- 七 稲賀敬二編『源氏物語抜書抄』(昭和五十五年 古典文庫 四〇四冊)による。
- 八 『源氏物語提要』の引用は、『源氏物語古注集成』(桜楓社)による。
- 九 「第三に」から「たき物合の事」への間には行移りがあり、次に「第六に」と続くことから、「第三に」と「たき物合の事」との間に誤脱があると考えられる。

(なかば よしこ/本学非常勤講師)